
美術教育専修4人展

～たまに羽が生えるとき～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称

美術教育専修4人展 ～たまに羽が生えるとき～

2. 目的など

今回私達は、制作中、自分が持っていた世界が思いもよらぬ方向に広がったときを、「たまに羽が生えるとき」と言い表わした。それは制作中の大きな喜びで、新たな表現に進める瞬間である。4人の表現テーマはそれぞれ異なるが、それぞれが「羽が生えた」と実感した作品を展覧会として発表、アーティストトークを通じて、自身とお互いの表現について考えを深める。

3. 代表者および構成員、助言教員

・代表者

山口 緑 (教科教育専攻 M1 回生)

・構成員

伊庭 唯花 (教科教育専攻 M1 回生)

松田 麻衣子 (教科教育専攻 M1 回生)

横田 朋子 (教科教育専攻 M1 回生)

・助言教員

丹下 裕史 (美術科)

第2章 内容や実施経過

1. 取り組み、役割分担の決定

7月～8月上旬頃

- ・展覧会のタイトルを決める。
- ・制作は個々のこれまでの制作の流れの延長で進めた。
- ・ポスター、DM デザイン、目録、アンケート制作
- ・模型を作って展示計画

2. ギャラリーでの展示

場所・京都教育大学付属図書館企画展示室

2016年10月12日(水)～10月21日(金)

アーティストトーク

10月20日(木) 16:30～90分

(ゲスト) 岩村伸一副学長、山内朋樹先生(美術科)

第3章 研究成果

企画の役割分担において4人それぞれが得意分野を生かして成し遂げた。制作においてのお互いの考えや葛藤していることを共有できた。展示空間を有意義に使い、彫刻も絵画も見やすい展示になった。他大学や外部の美術団体へも広報を行い、いろいろな方が見に来て下さった。

来場者 119名 (芳名録より)

1. 各自の研究成果 (別紙)

2. アーティストトークについて

来場者 20名

それぞれの作品について作者が発表し、岩村先生、山内先生から考察をいただく。美術科の谷口先生、安江先生、高木先生、また他大学からも先生がお越し下さり、色々な視点からご意見をいただいた。それぞれの「私」が見えてくる展覧会に見えた、とお言葉を頂いた。参加者からも「良い話が聞けて楽しかった」と感想を頂いた。

3. アンケート

アンケート回答数 41 名（京教生 12 名・教員 6 名・大学生 9 名・一般 14 名。20 代～80 歳までと幅広い年齢の方々に見ていただきました。）

個々の作品へ感想をたくさん頂いた。全体への感想は以下のとおり

- ・芸術の良し悪し等知識はないが、力強い雰囲気や繊細な一面が伝わってきて丹精込めて作られた作品が観れて良かった。
- ・色々な考える切っ掛けを見つけれられて良かった。
- ・自分の制作に生かされる刺激になった。
- ・それぞれの作者の色が出ていた。
- ・連作の中で光るもの、惰性的なものもあると思います。それでもなおこだわり継続、すぐには結果は出ないとしても試されている行為そのものが美術の意味ではないかと感じた。
- ・どの方も真に吐き出したい想いの強さを感じ、そのエネルギーのありように感銘しました。
- ・出品者の制作に対する意識の高さを感じ、私の制作意欲が高まった。
- ・入館の方法をもっと大学の関係者と相談して、多くの方々に鑑賞をと思います。

良い感想を書いてくださる事が多かった。観に来られた学生から、「創作意欲が高まった、刺激を受けた」という意見を多く頂いた。また「この作品の意味がわからなかった」「A はわからなかったが B の作品は納得した」等、いろいろ考察しながら鑑賞してもらえたこともアンケートからわかった。学内で展覧会を行う事は、出品者と鑑賞者お互いのよい刺激と学びの場になることがわかった。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

展示、アンケート、アーティストトークなど多くの機会から、自身の制作を見つめなおすことが出来た。人の視線は、ものを考えるきっかけになる。

自分の意図通りに鑑賞者に作品が伝わらない場面もあり、まだまだ作品の甘さ、表現不足を実感した。

絵画の3人はテーマは違えど今後は、イメージの不確かさにそれぞれが何をもちて迫るか、が課題である。

また4人とも、作品を言葉にする難しさを感じた。

それは作品が表現不足で言葉の内容についていけない場合や、作品から、作者と鑑賞者が感じる内容にズレがある場合、同じ言葉でも人によって認識の違いが生じること場合などからである。作品を作ると同様に、言葉にしていくことも、制作を深く進めるために必要だと学んだ。

アーティストトークの先生方から頂いた言葉、

「意図通りできたからといって、それは美術か？」

「これを見てください」というのは見えない。作り方とか作品の技術とかの作品は、そこから入っていけない。私の意図を伝えたい、そればかりが見えてきて作品が見れない」「むりやり頭で完成させようとする、目の前に出てきているところの魅力を忘れてしまう」「私がどこかにいる、私からへんなものが出てくる、という姿勢だと次々作品が出てくるのではないか」「自分の作品の中にある“わからなさ”はどこか。気になる、私が感じていることの不思議さ、それを一生懸命作品で経験しようとしたとき、何かが生まれるのではないか」。これらは、作品と自分の間をどのように持つかについて語られている。心に留めて制作に励みたい。

第3章 研究成果

1. 各自の研究成果

伊庭 唯花 (絵画・油彩)

○作品について

私は、ここ最近「水面」をテーマとしている。しかし、今回の作品は、今までのものとは少し表現の方法を変えた。それを、展示室で実際に飾ってじっくりと自分の目で確かめられたのは、私にとってとても大きなことである。

展覧会のアンケートを見ていると、『dive』がおもしろいを書いてあるものがいくつかあったが、それは私にとってなんだかしっくりこないことで、あまり受け止められない。もはや『dive』は失敗だったように思う。展覧会に来てくれた2人の若手作家の人たちは、『dive』を褒めなかった。それは、自身の制作の薄っぺらさを見抜かれたような気がして、とても嬉しかった。もちろん、作品を見て感じることは、人それぞれ違うだろうし、『dive』を本当にいいなと思ってくれた人がいてもそれはそれでよいのだが、自身が手を抜いた部分を見抜き、作品について深い話を投げかけてくれたのは、私にとって重要なことである。

『dive』と『揺れて、そのあとに』は、連作のつもりで制作したが、結果的に互いに悪い影響を与えたのではないかと考えている。『dive』は、自分が水面の層の感覚をどのように捉えているかを理解するために描いたスケッチで、自分の中で再構成したり、1つの絵として成立させたりする意識がなかった。それが、『揺れて、そのあとに』と並ぶことで、悪い意味での「わかりやすさ」を生んでしまったように思う。自分のやりたいことをつきつめようと描いた『揺れて、そのあとに』とは違う希薄さがあった。また、そのわかりやすさが、『揺れて、そのあとに』の方に人の心が入っていくのを邪魔しているようにも思えた。これが展示に関しての反省点である。

加えて、作品自体に関しての今後の課題として、まだまだ作品と深く向き合っていない点、最後まで自分のやりたいことに迫っていない点、テーマとしていることにどういった表現方法でリアリティをもたしていくか、などが挙げられる。これらは、決して、もっと自分の意図を作品に出していくということではなく、私自身が表現するものにもっと近づき、そのイメージをより厳しく追求していくことであるとする。私の感情や意図ではなく、モチーフの「ただそこにある、存在している、生きている、うごめいている」さまが、ぱっと最初に現れてほしい。そういった作品を作れるように、これからも制作していきたい。

○展覧会を終えて、その後の変化

まだまだ模索していることが多い。展覧会で発表した作品の表現方法では、自身のイメージが表現しきれない（イメージに適していない）ような気がするので、このシリーズは一旦止めて、次の表現へ移ることにした。私の作品はころころと表現を変えることが多いが、イメージを突き詰めていくうえで重要な過程であるとする。少しでも描くことに窮屈さを感じたらどんどん新しいことにチャレンジしていきたいと思っている。

松田 麻衣子 (絵画・鉛筆、アクリル)

○作品について

日々の生活の中で感じる感情を、抽象的な造形にのせて顕在化し、自分の感覚を確かめている。

○展覧会を終えて、その後の変化

具体的ではない抽象的なイメージを作品にしている為、表現するものがゆらぐと、何を作りたいかよりも観念的な絵作りの枠で手を動かしてしまうところがあると感じた。次は体験や経験からくる表現を取り入れて制作を進める。

山口 緑 (絵画・油彩、アクリル)

○作品について

見たことのない景色、世界観に出会うと特別なものをもらった気持ちになる。山を歩いている時よくそう感じ、心が空っぽになり、そして別の何かで満たされていく。そんな感覚に出会ったとき、私は絵を描こうと思う。

○展覧会を終えて

展示し、絵としての強さや緊張感が自分の想像以上に足りないことに気付いた。絵を描くときの楽しかった記憶は自分のものとして残っているが、それだけでは鑑賞者に何も送れていない。私は、絵のモチーフとしている山から色んなものをもらっている。鑑賞者にも、私の絵から何かもらって頂けたら嬉しい。作品を作ることというのは主観的で、けれどもある程度の客観性も必要で、その二つの間で自分は明瞭にならない気持ち悪さを感じている。今回の展示によって、その混沌としていたものや、自分の甘さが浮き彫りになったのが良かった。

作品を言葉で語ることは、自分や作品と向き合う事であり、また責任を担うことだと感じた。

○その後の変化

私の作品を観た鑑賞者から「描き慣れている」と

いう声があった。これは岩村先生がおっしゃた「安心感がある」という言葉と近いところを指していると私は感じた。この慣れや安心感から抜け出すことを意識して制作することにした。作家サイトゥオンブリーが暗闇で絵を描いたということを知りそれを参考にすることにした。私自身の視覚を奪う事によって、コントロール力を自ら無くし、今まで無意識にパターン化されていた慣れを崩すねらいで

ある。イメージを持ち目を閉じてドローイングを描いた。そしてそのドローイングを参考に油絵に描き起こしている。一歩何か抜け出す作品を作ろうと模索中である。

横田 朋子 (立体・粘土、陶、FRP)

○作品について

制作のテーマは「人間」と「人生」である。主に人体の立体制作であるが、その形態を写しながら人間のもつ内面性や感情、喜怒哀楽を表現している。人間は自然の一部であることを、身体の美しい規則性から感じる。生は死と表裏一体であり、生きることの喜びと同時に虚しさ、悲しさをも表現したい。

○展覧会を終えて、その後の変化

自分の作品は人体における具象表現という媒体を通して感覚や心象の表現であると確認できた。今迄は、写実や空間構成の技術を身につけることに重点を置いていたが、近頃はある程度習得できてきたと思うので、これからは何を表現するか重点をおけると思う。自分の内面、思想、印象などテーマ性を持ちたい。人間と人生が私のテーマであるが、それも大切にしつつ新たな表現を考えたい。今回の展覧会は私の制作の一つの集大成でくぎりとなった。